

芝山巖
慶讚中元



2020中元普度記錄



台湾・東呉大学人文社会学院 USR プロジェクト 「前世と現世－昔日士林百年の風采を再現する」

プロジェクトの紹介：

本プロジェクトは、教育部（文部科学省）大学の社会的責任（University Social Responsibility）の実践計画で、東呉大学人文社会学院院长黄秀端教授が率いる各分野の専門家たちによる社会的責任（USR）チームが、士林の宮廟、眷村、生態、飲食、教育の五つの側面から計画した内容である。学生が地域と連携を取り、共に学習し成長することにより、高等教育の社会的責任を果たすことを目的とする。

プロジェクトのリーダー：

黄秀端（政治学部教授兼人文社会学院院长）

プロジェクトの共同リーダー：

楊俊峰（歴史学部副教授兼歴史学部主任）

鄭得興（社会学部副教授兼中東欧研究センター CEO）

プロジェクトの協同リーダー：

黃顯宗（台湾・東呉大学微生物学部教授）

林宜陵（台湾・東呉大学中国文学部副教授）

施富盛（台湾・東呉大学社会学部助理教授）

沈筱綺（台湾・東呉大学政治学部助理教授）

左宜恩（台湾・東呉大学政治学部助理教授）

許凱翔（台湾・東呉大学社会工作学部助理教授）

プロジェクトのアシスタント：

李少恩、陳莘展、王紫寧

目録

起源	3
墓口を開ける	6
灯籠流し	12
中元節	18
墓口を閉める	25
短編映画：夙昔は典範がある - 士林中元記念	28



東呉大学人社院 USR プロジェクトウェブサイト



起源

国民政府が台湾に撤退した後、当時の蒋介石総統は、1950年に士林官邸に入居した。その後、芝山岩にある国防部軍事情報局（軍情局）など、総統の安全を守る関連組織も次々と設立された。軍情局の再設立と共に、その職員と家族が住む「眷村」¹も続々と建設されていった。軍情局の管理下の眷村は、台北市には十三カ所あった。そのうち、十二カ所は士林区にあり、外省人の住居の密集地が中山北路より東のエリアに誕生した。他の眷村とは異なり、情報工作員は控え目な行動と秘密主義を特徴とする。「秘密は墓場まで持って行く」という座右の銘もあるぐらいで、芝山岩に位置する政府機関及び周囲の眷村は神秘のベールに包まれていた。

台湾・東呉大学は、台湾近代史において大変重要な意義を持つ士林区にある。人文社会学院第一期のUSRプロジェクトでは、軍情局周辺の眷村の歴史の記憶を保存する「歴史の記憶を守る—士林眷村文化保存と展望」の計画を提出していた。グループメンバーは、眷村住民から話を聞き取り、記録としてまとめた時に、中山北路五段と六段より東の外省人の密集地域と、西側の本省人の住民たちとの間には一種の境界線があり、越えられない一線が存在していたことを発見した。士林官邸周辺は、住宅の高さ制限のみならず、

1 眷村（けんそん）は、台湾特有な文化形態の一つで、1949年から1960年代にかけ、国民政府と共に台湾に撤退してきた軍人とその家族が建設した家屋により形成された集落のこと。

新たな住民に対しても厳密な出身情報の調査が徹底的に行われた。当時、中正路にあったフルアイスクリームもバランプロモーションセンターも、士林官邸と深い繋がりがあった。また、士林官邸、軍情局、雨聲病院、雨聲小学校、双溪公園、国安局、陽明書屋、草山行館、四〇砲陣地、中山楼、国立故宮博物院なども、戒嚴令の解除までは当時の与党と何らかの関係があった。しかし、その周辺地域の発展は単に士林区の一部に過ぎず、この時期だけを対象に研究を進めていては、士林区の全体像が見えず、体系的な脈絡のある考察ができなくなり、文化・歴史の保存も断片的となる。

色々な考慮の末、本研究グループは、中山北路の西側にある本省人が密集する地区も文化・歴史の保存対象に入れることとした。時期は、漢人の移住時期、日本統治時期、及び国民党政府遷台以降の三つの時期に分け、研究テーマは、食文化、宮廟文化、教育発展、双溪流域生態、眷村文化を取り上げる。



士林エリアには、神農宮（1741 年）、惠濟宮（1764 年）、慈誠宮（1796 年）の三つの大きな宮廟がある。蒋介石氏がキリスト教徒だったため、この三大宮廟の宗教活動は本省人が主体となる。三大宮廟は清朝中期以前に建てられたもので、日本と国民党政府の統治時代を経て、今日の政権交代の時代まで、一百六十年間にわたり伝統的な「芝山巖慶讚中元普渡活動」²が続けられてきた。この活動は、台湾海峡を渡り、台湾に移住してきた明・清時代漢人の苦難の物語と深い関係があり、また、三大宮廟をつなげる役割も果たされている。研究グループのメンバーは、8 月 19 日（旧暦七月一日）から 9 月 17 日の「鬼門を閉める」までの活動を撮影し、書面と映像の方法で詳しく記録した。短編ドキュメンタリーは、資料の最後にある QRCode で公開されている。

2「普度」は「あまねく済度する」ことを意味する。「済度」は仏教用語で衆生を苦海から救い、彼岸へ導くことである。





墓口を開ける

時間：2020 年 8 月 19 日（旧暦七月一日）

士林区の芝山巖慶讃中元普渡活動は、清朝末期の林爽文事件と、台湾開拓時代の「漳泉械闘時期」³に由来する。戦いにより多くの死者が出たため、当時の住民たちは死者を埋葬し、普渡の儀式を行なった。その後、人々の更なる安らぎと安全を祈願するため、台北市芝山岩付近の士林街、石牌、北山、湳雅の四つのエリアの有力者が協力し、順番で中元普渡の儀式を主催するようになった。有力者たちは、四つのエリアにある四十九の里の住民の代表となる。それで、当番にあたるエリアの代表者は前の年から豚を丸々と大きく育て、重さを競う「神豚祭イベント」に参加していた。このことから、当時的一大イベントであったことが分かる。今でも、士林区には、「士林街は電灯を連ね、石牌は「紅龜粿」⁴を供え、北山頂（陽明山）は大きな豚を捧げ、湳雅（三芝蘭）は食器を揃える」という言い伝えがある。各エリアで慶讃中元普渡活動が盛大に開催された様子が描かれている。

3 出身地の異なる漳州と泉州の人々の間で起きた武力衝突のことである。

4 閩南人、潮州人、客家人、広東人などが祭りの時にもち米から作る料理の一種である。

この慶讃中元普渡活動は、鬼門⁵が開く旧暦七月一日から始まる。儀式が行われる当日の正午に、参加者は恵濟宮の前に集合し、午後から、水車辺万善堂、林仔口万善堂、牛踏橋保靈塔、芝山岩大墓公、永福里聖公媽、坪頂万善堂、内双溪万善堂、計七つの鬼門を開ける普渡儀式を行う。その中で最も有名なのは、恵濟宮付近にある芝山巖同歸所である。「大墓公」とも言われるが、当時は、「万善同歸」と呼ばれ、林爽文事件の「民変」と械闘の歴史的証人である。ほかの場所の「鬼門を開ける」「龕門を開ける」とは異なり、芝山巖の同歸所は、亡くなった方が中元普渡の月に思う存分堪能できるように、大墓公の「墓頂」を開ける。ちなみに、水車辺万善堂は双溪公園付近にある。東呉大学の教職員・学生が毎日乗るバスと車を通る場所だが、お墓の後ろに七月しか開かない、鍵がかかったドアがあることはあまり知られていない。長い間使われない鍵もあるため、開けるのに苦労するところもあった。

5「鬼」は、霊や幽霊の意味である。台湾の民間信仰では、旧暦の七月は「鬼月」と呼ばれ、縁起の悪い月としてされている。旧暦七月の一日に「鬼門開」という儀式が行われると、地藏王菩薩が管理する地獄の門（鬼門）が開き、死者の霊がこの世に戻り、自由に行動し、供え物を堪能すると考えられている。



墓地の門についての路線図



芝山巖同帰所

芝山巖慶讃中元普渡活動は、「大墓公」と言われる芝山巖同帰所が主な場所である。旧暦七月一日には、墓口を開ける儀式が行われる。「釈教法師」は同帰所の円頂を開ける。このことは、中の先民が外へ出て、供え物を堪能できることを意味する。続いて、士林エリアのほかの六つの「万善堂」へ向かい、「無主孤魂（無縁仏）」と呼ばれる亡霊に対し、この世に戻り供養を受け入れられることを告げる。



水車辺万善堂

士林双溪公園の向かい側にある土地公廟⁷の右側に狭い道があり、そこには一つのお墓が見られる。大正五年（1916年）の文字が刻み込まれている。水車辺万善堂と呼ばれる場所である。

⁶ 霊があのかからこの世にやってくることを告げる。ここから一か月の「鬼月」が始まる。

⁷ 土地神様を奉る廟のこと。



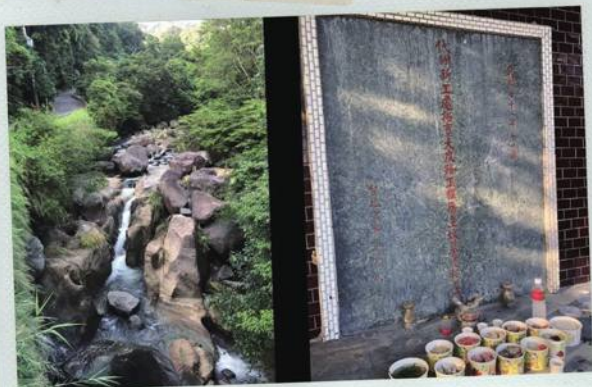
林仔口万善堂

林仔口万善堂は、双溪公園の隣の土地公廟の左側から遠くないところにある。普段は大勢の人が往来する場所だが、その存在が気付かれることはない。



牛踏橋保靈塔

銘傳大学台北キャンパスにある牛踏橋保靈塔は、銘傳大学の学生にも知られていない存在である。旧暦七月はちょうど大学の夏休から新学期の始まりにかけての時期にあたり、大学のキャンパスに入る度に学生たちから注目を集めている。



内双溪万善堂

内双溪の深い山にある万善堂に行くには、30 分ぐらいの山道がある。若者よりも年配者の方が体力があることに気付く。



平等里坪頂万善堂

平等里坪頂公墓にある万善堂。

陽明山の陽明教養院の側にある永福里の聖公媽廟。



永福里聖公媽廟



グループのメンバーは、宮廟の年配者と同じ車に乗り、密着取材する。途中、「若者が参加する意欲されれば十分だ」とよく言われる。



灯籠流し

時間：2020 年 9 月 1 日（旧暦七月十四）

今年の 9 月 1 日（旧暦七月十四）は、士林・石牌エリアが慶讃中元普渡活動の当番であった。まず、供養の儀式を行った。次に、芝山巖惠濟宮傍の大墓公、双溪公園傍の万善堂、神農宮、銘傳大学台北キャンパスの牛踏橋保靈塔へ順番に行った。夜になると、一行は学生と住民が用意した提灯を手に、儀式の責任者と当番も各自の灯籠を持ち、士林夜市へ入った。華やかな灯籠パレードは、夜市に入るとすぐに大勢の人々から注目され、カメラに写真が撮られていた。その後、士林慈誠宮を一周し、基河路の福德宮と石牌福星宮へ向かった。

慶讃中元の法会⁸では、最も重要なのは初日の夜の灯籠流し⁹だ。夜になると、各里の里長¹⁰は自分が担当する里の名称の入った灯籠を、石牌の住民も自作のカラフルな灯籠を手に持ち、洲美河双 21 公園まで同行し、儀式を行った。

8 水陸法会とも称する仏教行事で、最大級の中国のお施餓鬼行事である。水陸の題名からは、中国人の生命感によるを感じられる。人間が亡くなった後、魂が肉体または死ぬ場所から離れられず、溺死に苦しむ靈魂、または陸上に生活していた者の死後靈などが、その供養対象となる。

川辺はとても賑やかで、簡単な儀式とパフォーマンスが行われたが、区長、各里の里長、廟の主任委員と代表者、議員なども参列していた。最後は、法師の合図で灯籠が流されていった。点滅する灯籠と燃え上がった「紙銭」が水の上を漂い、朦朧とした月光を背景にした光景が美しく見えた。

灯籠流しは、慰霊・鎮魂が目的で、水難で亡くなった死者の霊が中元普渡に参加するように導き、地獄に陥り食事ができないことを免れるように手助けをする。死者の霊が中元普渡に参加するように明るい灯りで冥路を照らすため、「照冥」とも言われる。

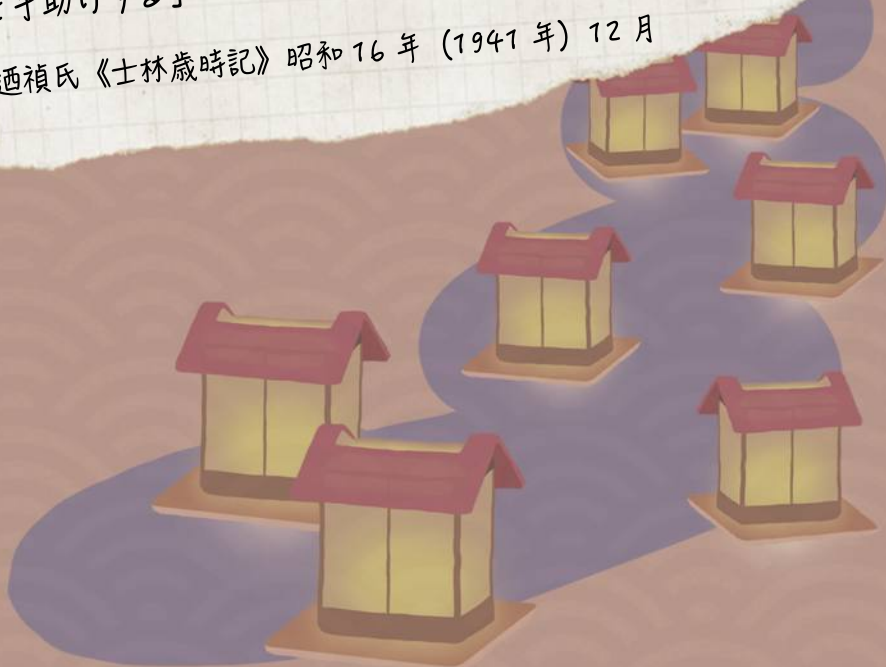
9 灯籠流しは、慰霊・鎮魂の目的のために神々や祖先を祀る祭祀である。台湾では、中元祭の前に近くの川で灯籠流しの習俗があり、道（川）を照らし、死者の霊を「中元普渡」に招くことを意味する。その際に川に流される灯籠を「水燈」と呼ばれ、紙で家や蓮に似せて作られ、中に蠟と油を入れて火を点すものだ。自分の名前を灯籠に書き、奉献した人を死者の霊に伝える。灯籠が遠くまで流れて行くほど、幸運がもたらされるとされている。たくさんの灯籠が川を流れて行く姿は幻想的で、季節のイベントとして有名で、多くの見物客を楽しませる。

10 台湾における行政区分では、「里」は、最も小さな行政単位である。



「旧暦十四の夜に、行列は芝山巖林仔口を出て、広い畑と並木が両側にある大通りを通り、恵濟宮境内へ向かう。日没後、行列の順番は、大柱灯→副大柱灯→斗灯→花灯→龍灯→各集落水灯→水灯列→水月灯→綵灯→山水灯→花鳥灯→魚灯→紗灯→たいまつ→内山鑼鼓→ガラス灯→蓮花灯等灯籠は廟の前の川から下流へと流され、川の上に点滅する綺麗な灯籠は人々を引き付ける。灯籠流しは無縁仏のために行われるもので、小屋型の灯籠を設置し、往の無縁仏がその世へ行くことを手助けする」

潘迺禎氏《士林歲時記》昭和16年(1941年)12月



各里と各宮廟
が用意した灯籠
は惠濟宮から出
発。



各里、各宮廟が
用意した灯籠は芝
山岩を降り、各場
所を巡回する車へ
向かう。

巡回車の行列
は士林夜市を通
る。





灯籠行列は徒歩
で士林夜市を通過。



灯籠行列は石牌福
星宮で地元の住民と
合流し、洲美河双 21
公園へ出発。

議員たちも洲美河双
21 公園に足を運び、中
元普渡儀式に参列。



灯籠流しは、普渡を受けるように水中の無縁仏を迎える儀式だ。「水幽祭」の一つで「照冥」とも言われる。



中元節と盂蘭盆節の灯籠流しは、水域付近の盂蘭盆節でよく見られる。死者の魂を弔い、灯籠やお盆の供え物を川に流す行事である。台湾の灯籠は、紙で作られた小屋型の灯籠が多く、流す前に筆で両側と背後に「慶讃中元」、「廣施盂蘭」などの「中元敬語」の文字を書く。供養する人のこと「好兄弟」（無縁仏）に知らせる。「普渡旗」を挿す人も僅かながらいる。ちなみに、台湾の風習では、灯籠は遠くへ流されるほど、灯籠の持ち主の一族は翌年の運勢がよくなると考えられている。



中元節

時間：2020年9月2日（旧暦七月十五）

9月2日（旧暦七月十五）の中元活動は、午前には恵濟宮で三界公（上界・天官大帝、中界・地官大帝、下界・水官大帝）に感謝を申し上げ、午後には巡孤（無縁仏の巡回）儀式が行われた。芝山巖恵濟宮の傍にある大墓公から出発し、もう一度ほかの六個万善堂を通り、天母、陽明山、石牌エリアと、各普渡場所を回り、石牌福星宮に集合した。巡孤の目的は、普渡儀式が行われ、ご馳走を招待することを無縁仏に告げることにある。夜は、恵濟宮に戻り、「放燄口大普度」¹¹と「跳鍾馗」を行った。「跳鍾馗」の目的は「押狐」にあり、全ての霊が元の場所に戻るようにする。鍾馗が舞台から降り会場を回る時は、霊に取り憑かれないように、その場にいた人はみんな口を閉じ、遠くまで下がる。儀式の時は、そばにいた人は話すことが許されず、人の名前も呼んではいけない。誰かが話をしようとする、必ず他の人に止めさせられる。「跳鍾馗」の厳粛な雰囲気と、カーニバルのような灯籠流しのパレードとは、全く異なっていた。すべての儀式が終わった時にはすでに夜中で、芝山岩から下りるのは少し肝試しのようなものだった。

11「放燄口」は「燄口鬼」（餓鬼）の口の中の炎を解除することを意味する。この種の「鬼」は、食事の量が大きい、喉が細く、食べ物があっても、喉を通らない。悪の業による苦の報いのため、美味しい食べ物があっても、喉を通るときにまた穢れた血に変わり、口の中から炎を吐き出す。炎に焼かれ、口から炎を吐き出すことから、「燄口」と言われる。餓鬼の内心にある恨みや貪りを解除し、食事ができるようにするために、「燄口」の苦から解放されるようにするのが「放燄口」である。

山岩から下りるのは少し肝試しのようなものだった。
「中元節は「七月半」とも呼ばれる。人々は祖先を祭り、
夜は盂蘭盆行事を行う。灯籠流しの灯りが輝き、豊富なお
供え物が陳列され、町街道は人混みで大変混雑していた。
少女は、季節の花をつけ、きれいな服装で出かけていた。
祭祀は、士林特有の福建漳州訛りで行われた。面白い供養
豚も見られた。コンテストで優勝した供養豚は鑑賞される
ために展示されていた。やく七百キロだった。

廟の境内では、法事が行われ、有力者が競って祭壇を飾って
いた。色鮮やかな灯りは家屋を明るく照らす。中央の祭壇には、
骨董品と書画が置かれ、線香も焚かれていた。みんなは碧螺春、
鉄観音などのお茶を飲み、町中は往来する人々で賑やかだっ
た。「結壇」は「花醮」と呼び、儀式は法師による読経の声の
中で終了した。普通の家庭や個人で行われる小規模の「私普」
は七月下旬に行なわれる。午後三時から、五種類の動物の肉、
お餅料理、果物などのお供え物を用意し、線香を立て、紙銭
を燃やし、無縁仏に供養する」

潘迺禎氏《士林歳時記》昭和16年(1941年)12月



神豚祭は、普渡法会
の大きな特徴の一つ
。丸々と大きな豚を
供え物とし、神様に
対する敬虔な態度を
示す。



法師は、石牌エリアにある各普渡場所で、巡孤
普渡儀式を行う。各普渡場所でも、そのための
豊富な供え物が用意される。

車の行列は、天母、士林、石牌エリアを回り、無縁仏を供養する。



放焰口は仏教の儀式で、《救拔焰口餓鬼陀羅尼經》に基づき、施食餓鬼の法事を行う。この法会は、餓鬼道眾生を主な施食対象とし、餓鬼が成仏するように、放焰口の儀式を行う。これも死者を追悼する仏教の行事の一つである。

紙で作られた屋形の棚は二種類ある。一つは「寒林所」（昔の中国の宮廷学芸機関の「翰林院」）で、この世で官位がある人の死後のために用意されるものだ。もう一つは同歸所で、一般の庶民が亡くなった後のためのものである。より盛大な普渡の場合は、「好兄弟」（無縁仏）のための紙製品の浴室、更衣室などもある。



中元普渡儀式で山神騎獅、土地公騎虎を供養する。鬼の魂が邪魔しないように、道場を守ることを意味する。



儀式終了後、紙で作った物を燃やし、
天の神様に届ける。



普渡のお供え物も私普（家庭や個人で行うもの）のように、
その上に全て線香と「紙旗」を立てる。神様への供え物には線
香と「紙旗」は必要ないが、死者へのお供え物はその霊に通じ
るように線香を立てる必要がある。「紙旗」を立てることで、
祭る死者の範囲と祭祀者を明記する。



「廟普」は、最後に「跳鍾馗」が行われる。祭祀が終わってからもその場から離れない霊がいるため、廟は、道士や法師を招き、冥界に帰ってもらうように、「跳鍾馗」による「押孤魂」(無縁仏を押さえる)を行う。

「跳鍾馗」の主な作用は悪い物の駆除だ。普渡の時に行われる「押孤魂」(無縁仏を押さえる)儀式は比較的に優しい方法である。法師の読経を聞き、供え物もいただいたことで、冥界のルールに従い冥界へ帰るように、好兄弟(無縁仏)に理解してもらう。「跳鍾馗」が終わると共に、廟普も順調に終了する。



墓口を閉める

時間：2020年9月17日（旧暦八月一日）

最後は墓口を閉める儀式だ。9月17日（旧暦八月一日）に、我々は再び芝山岩にある恵濟宮の前に集合し、午後二時に儀式を始めた。当番の主催者が管轄下の里長の名前を一通り確認した後、みんなは法師と共に線香を立て、祭文を読み、花や果物、野菜などの供え物を捧げた。その後、祭文と「紙銭」を燃やし、爆竹を鳴らし、儀式を終了させた。墓口を閉める前に、土地公廟で供え物を献供し、死者の霊が冥界に帰っていくようお願いした。最後に、法師が代表者を率いて、大墓公の屋上で正式に墓地の門を閉めた。それから、一つ一つの万善堂を回り、全部の墓地の門を閉め、錠を掛けた。これにより、旧暦七月の全部の儀式は完成した。

この一カ月私たちが参加した鬼月の宮廟活動はようやく一段落となった。。この一か月の間、いつも僅かな時間で山に登ったり下りたりして、七つのスケジュールをこなした。基本的には一人のアシスタントがバイクに乗り、もう一人がカメラで密着取材した。大変な仕事だった。活動全体を通して、「眾生普渡」、「族群融合」の精神を身を持って体験した。生前の所属の集団と行いの善悪とは関係なく、この世に未練を残さず成仏するように導く。このことは、死者に敬意を示し、みんなが平安に暮らすことにもつながる。若い世代が地元の信仰と伝統文化に大きな関心がなく、関連知識もないため、私たちの努力を通じ、この種の伝承が重視されることを願う。





地元の行政機関の長官、議員、里長、有力者が出席した芝山巖にある大墓公の墓門を閉める儀式。



保靈塔の墓地の門に錠を掛ける。中元普渡の行事が完成したことを意味する。





畏れ敬う気持ちで豊富な供え物を用意する。坪頂公墓にある好兄弟（無縁仏）に差し上げる。



内双溪にある万善堂は、山道を歩き川を渡り、長い時間かけてやっとたどり着いた。

短編映画：

夙昔は典範がある - 士林中元記念活動記録

東呉大学人文社会学院 USR 研究グループは、文字でこの「芝山巖慶讃中元」の活動を記録した他に、映像の方法により短編ドキュメンタリーにも記録している。この資料の最後のところに QRCode で公開されている。

伝統風習では、旧暦七月に「普渡」¹³という祭祀の儀式が行われる。台湾北部で最も有名なのは基隆市にある老大公廟の「鶏籠中元祭」だが、実は、士林でも一百六十年の歴史をもつ、伝統的な「芝山巖慶讃中元」の普渡儀式がある。その起源は、清朝末期の林爽文事件、台湾開拓時代の「漳泉械闘時期」¹⁴に由来する。戦いにより多くの死者が出たため、当時の住民たちは死者を埋葬し、普渡の儀式を行なった。その後、人々の更なる安らぎと安全を祈願するため、士林区と北投区の士林街、石牌、北山、湳雅の四つのエリアの有力者が協力し、順番で中元普渡の儀式を主催するようになった。有力者たちは、四つのエリアにある四十九の里の住民の代表となり、今年は、石牌エリアが担当となった。

13「普渡」は「あまねく済度する」の意味で、「済度」は仏教用語で衆生を苦海から救い、彼岸へ導くことである。

14 出身地の異なる漳州と泉州の人々の間で起きた武力衝突のことである。

芝山巖慶讚中元普渡活動は、「大墓公」と言われる芝山巖同歸所が主な場所である。旧暦七月一日には、墓口を開ける儀式が行われる。「釈教法師」は同歸所の円頂を開けるが、このことは、中の先民が外へ出て、供え物を堪能できることを意味する。続いて、士林エリアのほかの六つの「万善堂」へ向かい、「無主孤魂（無縁仏）」と呼ばれる亡霊に対し、この世に戻り供養を受け入れられることを告げる。この六つの「万善堂」は、水車辺万善堂、林仔口万善堂、牛踏橋保靈塔、芝山岩大墓公、永福里聖公媽、坪頂万善堂、内双溪万善堂である。双溪公園の向かい側にある土地公廟の右側に狭い道があり、そこには一つの小さなお墓が見られる。大正五年（1916 年）の文字が刻み込まれている。これは、水車辺万善堂と呼ばれる場所である。双溪公園の隣の土地公廟の左側から遠くないところにある林仔口万善堂は、普段は大勢の人が往来する場所だが、その存在が気付かれることはない。銘傳大学台北キャンパスにある牛踏橋保靈塔は、銘傳大学の学生にも知られていない存在である。旧暦七月はちょうど大学の夏休から新学期の始まりにかけての時期にあたり、大学のキャンパスに入る度に学生たちから注目を集めている。

15 霊があの世界からこの世にやってくることを告げる。ここから一カ月の「鬼月」が始まる。

16 土地神様を奉る廟のこと。

旧暦七月十四日の法会で最も重要なのは夜の灯籠流しである。午後は法師が先頭に立ち、石牌エリアの十六個里¹⁷の里長がその後に続く。自分が担当する里の名の書かれた灯籠を持ち、芝山巖の惠濟宮から出発し、各万善堂と、士林区三大宮廟の神農宮と慈誠宮を巡回した。一行が基河路から士林夜市へ入った時は、すでに夜になっていた。夜市はいつもの人出ではなかったが、多くの観光客の注目を引き寄せ、写真もたくさん撮られていた。その後、石牌福星宮に来て、地元の住民と合流した。住民たちは、自ら描いた灯籠を持ち、一緒に洲美河双 21 公園へ向かった。着いた時には、そこは既に賑わっていて、人々が歌ったり踊ったりし、祭囃子にあわせて獅子も舞い踊っていた。また、地元の行政機関の長官、政治要人、地元の有力者なども出席していた。この儀式の重要性が伺えた。

旧暦七月十五日の午前中は、惠濟宮で読経法会が行われた。会場の両側に置かれていた十殿閻羅の画像は、数年前に大ヒットの韓国映画《與神同行》を思い出された。見る人が恐れ敬う気持ちになる。午後は、法師と車の行列が、石牌エリアの各里を見回る「巡孤」活動を行った。夜は、惠濟宮に戻り、「放焰口」の儀式を行った。「放焰口」は釈迦牟尼仏の弟子「阿難尊者」に由来するものだが、死者の霊と餓鬼道で苦しむ衆生に食事を施すことを意味する。儀式が終了後、法師は信者に小銭とキャンディをばら撒く。人々

17 台湾における行政区分では、「里」は、最も小さな行政単位である。

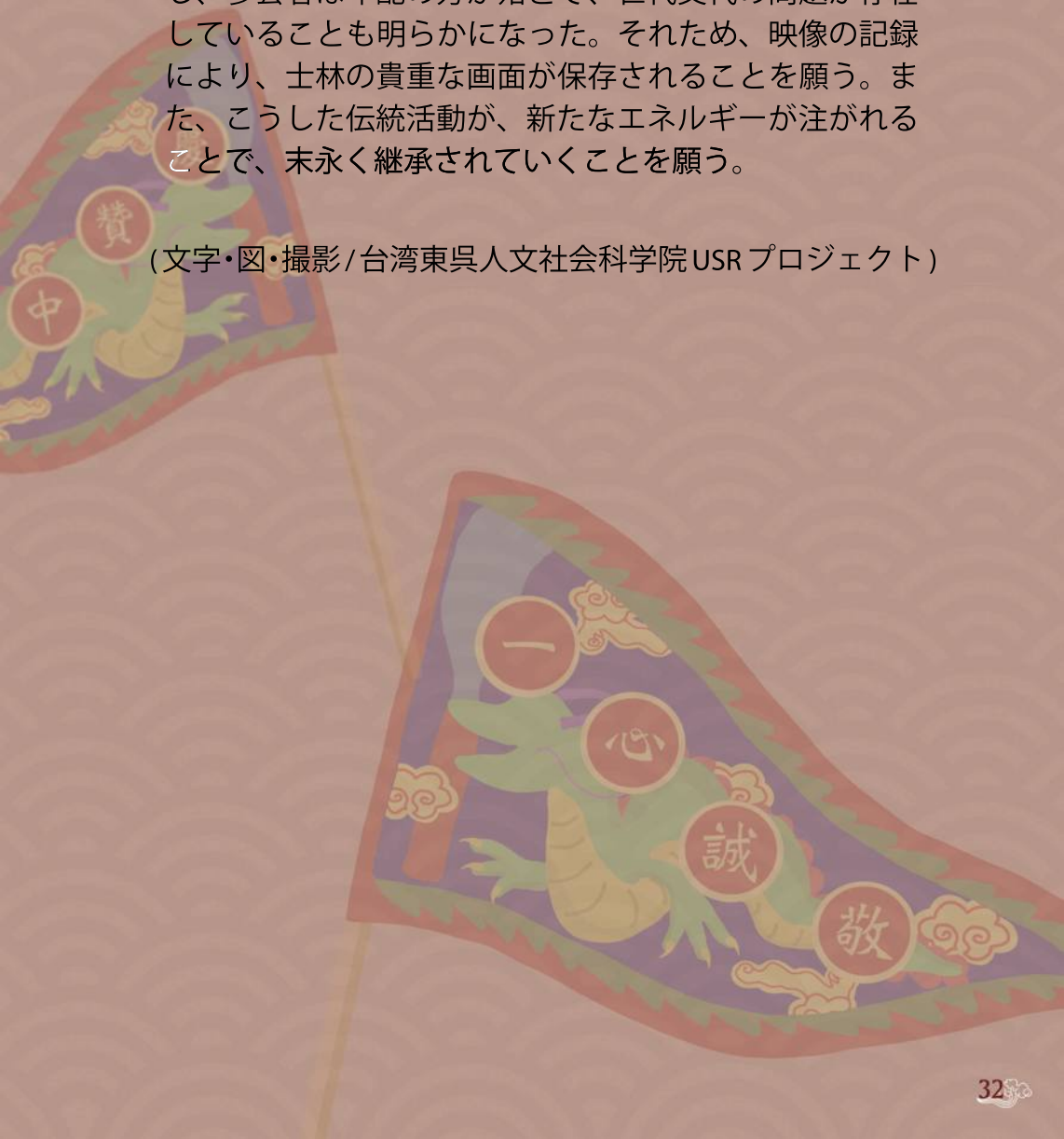
はそれを奪い合うことになるが、いわゆる「搶孤」である。奪い合う時に生じた「陽気」により霊の亡霊の「陰気」が押さえられると考えられている。但し、中国の蘇州・浙江地域から台湾に伝来した仏教では、食事の奪い合いだと亡霊に勘違いされないように、小銭とキャンディが地面に落ちる前に拾ってはいけないという考えがある。

「放焰口」の後で一番重要な行事は「跳鍾馗」である。一般的には、その目的は、例えば二年前に台湾映画《粽邪》で表現されているように、煞気（運気を下げ、悪い気）を鎮めることにある。しかし、普渡の儀式の「跳鍾馗」は比較的に優しいものである。すでに法師の読経を聞き、供え物もいただいた以上、このまま居着いてはいけないと、亡霊に告げる。今は、パフォーマンスの要素が入っており、見学も許されているが、しかし、現場は、厳粛な雰囲気包まれていた。人々の視線は、舞台の上の鍾馗の動きを追っていた。鍾馗の叱りの声と楽器演奏の音以外は、その他の騒々しい音と声はなかった。この儀式の厳粛な雰囲気を感じさせられた。

旧暦八月一日に、墓口を閉める儀式が行われた。正午は法師が先頭に立ち、石牌エリアの里長がその後に続き、まず水車辺、林仔口、そして銘傳大学台北キャンパスの保靈塔を回った後、芝山巖の大墓公に戻って来た。午後は、陽明山にある陽明教養院の傍にある永福里聖公媽廟へ向かい、平等里坪頂公墓の万善堂を回り、最後は内双溪奥にある萬萬善堂へ行った。これにより、旧暦七月の儀式は全部終わった。

東呉大学人文社会科学学院のUSRプロジェクトが計画した今回の密着取材では、大勢の方々から温かいご支援をいただき、多方面にわたり大変お世話になった。しかし、参会者は年配の方が殆どで、世代交代の問題が存在していることも明らかになった。そのため、映像の記録により、士林の貴重な画面が保存されることを願う。また、こうした伝統活動が、新たなエネルギーが注がれることで、未永く継承されていくことを願う。

(文字・図・撮影/台湾東呉人文社会科学学院USRプロジェクト)



短編映画接続



短編映画
ウェブサイト接続



版權頁

主編者：黃秀端

撰述者：陳莘展

美術編輯：陳宥瑾

發行：東吳大學人文社會學院 USR 計畫チーム

台灣東吳大學人文社會學院 USR 計畫チームメンバー：

黃秀端、楊俊峰、鄭得興、

黃顯宗、林宜陵、施富盛、

沈筱綺、左宜恩、許凱翔、

李少恩、陳莘展、王紫寧





東呉大学人文社会学院USRプロジェクト
「前世と現世ー昔日士林百年の風采を再現する」